●〈症例〉

プロトンポンプインヒビターによる改善が示唆された食道乳頭腫を伴う Schatzki輪の1例

吉田有輝 富永健司 佐藤浩一郎 根本夕夏子
伊藤紗代 嶋山文子 加藤 充 北川 智之
権 勉成 齋藤倫寛 竹中由希夫 徳久 順也
松井貴史 前谷 容

東邦大学医療センター大橋病院／消化器内科

〔Key Words〕 食道乳頭腫, Schatzki輪

はじめに

今回我々はプロトンポンプインヒビター (PPI) による改善が示唆された食道乳頭腫を伴う Schatzki輪の1例を経験した。若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

症例：60歳代，男性。

主訴：食物のつかえ感。

既往歴：高血圧，肝嚢胞。

家族歴：特記すべきものなし。

現病歴：平成21年10月頃から食物のつかえ感を自覚した。症状増悪したため平成22年4月に近医を受診した。上部消化管内視鏡で食道・胃粘膜接合部に隆起性病変と全周性の輪状狭窄を指摘され，当院を紹介受診した。来院時現症に明らかな異常所見なし。

血液検査所見：白血球3700/ μ l，赤血球466万/ μ l，Hb 14.9g/dl，Hct 41.9%，血小板16.3万/ μ l，CEA 1.9ng/ml，CA19-9 36.9IU/ml。

上部消化管内視鏡所見：食道・胃粘膜接合部にほぼ一致して全周性の輪状狭窄があり，Schatzki輪と診断した。またその右壁に表面顆粒状の10mm大の亜有茎性隆起性病変を認めた (Color 1a)。反転観察で食道裂孔ヘルニア (滑脱ヘルニア) の併存を確認した (Color 1b)。また，食道・胃粘膜接合部直上に約3mmの粘膜障害があり，逆流性食道炎 (ロサンゼルス分類 GradeA) であった (Color 1c)。隆起性病変はヨードによる染色が認められ (Color 1d)，通常観察像と併せ，食道乳頭腫と診断した。同病変からの生検で食道乳頭腫と矛盾しない病理所見が得られた (Fig. 1)。生検施行後も乳頭腫の形態の変化はなく残存していた。

初回の上部消化管内視鏡終了後にランソプラゾール 30mg/日を開始したところ，自覚症状は速やかに改善した。

Fig. 1 Histopathologic analysis of the biopsy specimens of the protruding lesion shows papillomatous squamous epithelium with chronic inflammation.

ランソプラゾール内服7ヵ月後に上部消化管内視鏡を再検した。逆流性食道炎，食道胃粘膜接合部の狭窄は改善し，右壁の食道乳頭腫は縮小し，表面は平滑で白色調であった (Color 2)。その後もランソプラゾール内服を継続し，症状の再燃は認めていない。

考 察

横隔膜食道靱帯付着部はA ringまたは収縮輪と呼ばれ，横隔膜より食道側に持ち上がった滑脱ヘルニアの中にできた輪状の膜様突出物はSchatzki輪 (B ring) と呼ばれている¹⁾。またSchatzki輪の頻度は上部消化管内視鏡施行例の2.2%との報告がある。その成因として胃液の逆流あるいは好酸球性食道炎に続発するという炎症説，食道の短縮による粘膜襞形成説などがあるが，定説はない¹⁾。食道内腔が2cm以上あれば自覚症状は出現しないが，1.3cm未満になると常に嚥下障害が出現すると言われている¹⁾。

本症例では滑脱ヘルニア内に輪状の膜様狭窄を認め Schatzki輪と診断し得た。さらに逆流性食道炎も認めており，Schatzki輪の成因として胃食道逆流の関与が示唆された。

また，食道良性腫瘍は稀であり，頻度は上部消化管内視鏡施行例の0.3%との報告がある。乳頭腫はそのうち8%程度と言われている。肉眼的には無茎性ないし有茎性の隆起を形成し，表面は顆粒状あるいは平滑で白色調を呈する。組織学的には重層扁平上皮の乳頭増殖から成り，細胞異型を認めることは稀である。成因は胃食道逆流などの慢性刺激によると考えられている²⁾。

1983年から2011年まで医学中央雑誌で我々が検索したところ，食道乳頭腫とSchatzki輪を合併した報告は

認められなかった。PPI内服により縮小した食道乳頭腫の報告は2例あり、PPI内服後、吉田ら³⁾は3カ月、有馬ら⁴⁾は2カ月で縮小した症例を報告している。

本症例では食道乳頭腫に加えてSchatzki輪もPPI内服による改善が示唆された。

おわりに

逆流性食道炎のみならず食道乳頭腫、Schatzki輪の成因に胃食道逆流の関与が示唆された貴重な症例と考えられたため報告した。

文 献

- 1) 西 研：食道ウェブとシャッキ輪。別冊日本臨牀新領域別症候群シリーズ，11：59—63，2009。
 - 2) 幕内博康，島田英雄，千野 修，他：まれな食道良性腫瘍および腫瘍様病変の分類と頻度。胃と腸，43：255—266，2008。
 - 3) 吉田 操，葉梨智子，山口達郎，他：逆流性食道炎に随伴した食道扁平上皮papillomaの1例。胃と腸，34：1033—1036，1999。
 - 4) 有馬美和子，多田正弘，相田順子：食道乳頭腫の2切除例。胃と腸，43：305—309，2008。
- 〈カラーは3頁に掲載〉

A patient with Schatzki ring of esophagus associated with an esophageal papilloma, in whom improvement due to proton pump inhibitors was suggested

Yuki Yoshida	Kenji Tominaga
Koichiro Sato	Yukako Nemoto
Sayo Ito	Fumiko Shigiyama
Mitsuru Kato	Tomoyuki Kitagawa
Gon Katsushige	Michihiro Saito
Yukio Takenaka	Jyunya Tokuhisa
Takashi Matsui	Iruru Maetani

We encountered a 60-year-old male patient with a sensation of dysphagia as a chief complaint. Upper gastrointestinal endoscopy revealed an annular stricture immediately above the esophagogastric mucosal junction, associated with a 10-mm semipedunculated and protruding lesion in the right wall of the esophagus directly above the stenosis site. The surface of the protruding lesion was granular, and a diagnosis of papilloma was made based on upper gastrointestinal endoscopy. Findings on biopsy of the lesion were consistent with those of esophageal papilloma. The administration of proton pump inhibitors at a dose of 30mg/day was initiated after the initial upper gastrointestinal endoscopy, and his subjective symptoms promptly resolved. Upper gastrointestinal endoscopy was conducted again seven months after proton pump inhibitor initiation. The stenosis of the squamo-columnar junction was improved, and the volume of the protruding lesion in the right wall was reduced. Administration of the agents has been continued without the occurrence of symptom flares. This case was considered to be important, suggesting the association of gastroesophageal reflux with the occurrence of esophageal stenosis and a protruding lesion of the esophagus.

Division of Gastroenterology, Department of Internal Medicine, Toho University Ohashi Medical Center.